

ヴァーン・スナイダーの小説『八月十五夜の茶屋』

— 米国占領軍政府に見捨てられた警句・教訓 —

渡久山 幸功*

Vern Sneider's *The Teahouse of the August Moon*

— A Lesson Disregarded by the U.S. Military Government —

TOKUYAMA Yukinori

要 旨

この小論は、戦後間もない沖縄を舞台にしたアメリカ小説『八月十五夜の茶屋』の分析である。作者であるヴァーン・スナイダーは1945年4月から9月まで米軍将校として沖縄に滞在していたが、その時の自伝的体験を基に創作した原作の研究はほとんど進んでいない。戦後間もない米軍沖縄占領政策を理解するうえで、この原作の重要性を解明する。

要 約

ヴァーン・スナイダーが書いた沖縄を舞台にした小説『八月十五夜の茶屋』（1951年）は、ベストセラーになり、その後、戯作家ジョン・パトリックによって舞台化され、3年を超える超ロングランを記録し、後に映画化され大ヒットした。小論では、数少ない先行研究の概観、原作と翻案の比較、その当時の作品と関連する様々な文献（新聞記事、書評、作者自身のインタビュー等）を調査しながら、本作品の解明を試みた。

この作品は映画のヒットによって、沖縄の人々の記憶に残っているが、この映画版と原作の小説には大きく異なる点がある。特に、主要人物の芸者（沖縄のジュリ）や沖縄人通訳者の扱い方である。スナイダーの原作では、主人公のアメリカ人将校に現地沖縄人からのプレゼントとして芸者を二人用意しているが、これは映画とは異なり、アメリカ人将校と芸者との恋愛関係を描いておらず、芸者のイメージの脱セクシャリティ化を企図している。つまり、沖縄文化や沖縄人の等身大の描写を心がけ、ステレオタイプの描写を極力抑えられているところに特徴がある。また、軍事植民地沖縄に対するアメリカ軍政府への提言として、東洋人の住民の幸福は欧米的なものではないことを認識することが重要であり、彼らの異文化・習慣を尊重し、アメリカ文化や価値観を温情的に押し付けることがないように示唆している。しかし、それは、単にクリスマスのサンタクロースの様にプレゼントを与えるだけではなく、現地民の自立を促し、真の意味での民主化を提言しているため、在沖米軍（占領政府）にとっては、容認できない「危険な」テキストになっている、と指摘した。

キーワード：ヴァーン・スナイダー、小説『八月十五夜の茶屋』、現地化・原住民化、異文化変容・適応、芸者の脱セクシャリティ化

Abstract

This paper explores Vern Sneider's best seller novel, *The Teahouse of the August Moon* (1951), dealing

* 沖縄大学地域研究所特別研究員、沖縄大学非常勤講師 yukinoritokuyama@gmail.com

with a community called a fictitious Tobiki village on Okinawa island during World War II. It was later adapted into the long-run play in Broadway from 1953-1955 and smash-hit Hollywood film under the same title by a playwright John Patrick. Whereas many elderly Okinawans remember the comedy film primarily because a famous American actor, Marlon Brando, plays a "yellowface" role of a young Okinawan interpreter who, with Okinawan wisdom, coaxes American officers into building a teahouse for geisha girls instead of a Pentagon-shaped school building, the original novel has drawn very scant attention as a serious literary work until recently mainly because of the less serious, fantasy play/film version. I would argue that the original novel is worth perusing since it possesses the potential of threatening the U.S. military occupation policy ironically by implying that it is crucial to exert as "true" American democracy as it is believed to be.

In comparing the original novel and the adapted play/film, I will indicate major differences between two versions in order to demonstrate the very fact that the novel is much more serious and political than one can imagine. Furthermore, Sneider intended to desexualize stereotypical images of geisha girls by reinforcing their highly skilled performing arts for customers who visit their teahouse in order to warn American soldiers and American public by large against exploiting Asian women sexually. My main argument is that Sneider tried to show his enormous respect for Okinawans and their culture and implicitly demanded that American military personnel and occupation government not impose the American culture and values on the native people against their will. Orientalism is hardly found or at least found far less in the original novel than in Patrick's adaptation which is designed to satirically and even parodistically criticize the U.S. military organization. In the former, Captain Jeff Fisby and the author himself apparently suggest that it is a key to provide the native people with what they truly need for the sake of the cordial relationship between the U.S. and Okinawa and of peaceful rule on the foreign countries/regions like Okinawa Islands. For non-western people such as Okinawans, their ultimate happiness is possibly never the same as that of Americans.

Key words : Vern Sneider, the novel *The Teahouse of the August Moon*, going native, acculturation/transculturation, desexualization of geisha girls

はじめに

ハリウッド・スターあったマーロン・ブランド (Marlon Brando 1924-2005) が沖縄人を演じた稀有なコメディ映画として有名な『八月十五夜の茶屋』(*The Teahouse of the August Moon*) の同名タイトルの原作小説が昨年『八月十五夜の茶屋 沖縄占領統治1945』として新訳された¹。オリジナルの英文小説は、原作者ヴァーン・スナイダー (Vern Sneider, 1917-81) が、米軍民政員として沖縄戦に参加した実体験をベースにストーリーを書き上げ、1951年にアメ

リカでベストセラーになった。これまで内村直也訳で1956年に翻訳が出版されていたが、長い間入手困難になっていたため新訳として刊行されたことは、大変意義深い。この新訳によって、アメリカ文学に沖縄と沖縄戦がどのような影響を与えたかを知ることができるであろう。この作品は、後に、戯曲家のジョン・パトリック (John Patrick 1905-1999) によって翻案され、1953年にブロードウェイで舞台化された戯曲は原作以上に大ヒットし、多くの国々で上演され、好評を博した。この作品では批評家からも高い評価を受け、パト

リックは、ピューリツァ賞など数々の賞を受賞している。その後ハリウッドによって映画化が計画され、マーロン・ブランドやグレン・フォード（Glenn Ford 1916-2006）などアメリカ人映画スターと共に京マチコなどの日本人役者が多数出演した。奈良およびハリウッドの映画撮影スタジオで収録されたこの映画は、1956年から57年にかけてアメリカや日本で大ヒットしている。

これまで、戯曲や映画に関する学術的研究は多数あるが、原作小説の研究は、ほとんどないといっても過言ではない。小論では、まず、あまり知られていない原作者スナイダーの経歴を紹介し、数少ない原作小説の先行研究を概観した後、原作と翻案の比較考察を行い、その当時の作品と関連する様々な種類の文献（新聞記事、書評、インタビューや作者自身のエッセイ等）を駆使しながら、スナイダーの創作の意図や小説に内包する政治性を解明し、オリジナル作品の再評価を試みるものである。

ヴァーン・スナイダーの経歴と小説『八月十五夜の茶屋』の先行研究：

ヴァーン・スナイダーは、1916年の10月にミシガン州のモンロー市で生まれた。高校時代テニスや陸上競技を行うスポーツマンである一方、放課後の課外活動として小説創作のクラスを受講していた。1935年に地元高校を卒業後、インディアナ州にあるカトリック系の大学ノートル・ダム大学（Norte Dame University）に進学し、哲学を専攻した。大学在学中、大学新聞や年鑑に原稿を寄稿したり、ラジオ台本創作クラブの部長を務めた。1940年に大学を卒業すると、翌年米国陸軍に兵卒として入隊し、しばらくヨーロッパ戦線にいたが、1944年の秋に帰国を命じられると、軍政府に配属され、ニュー・ジャージー州のプリンストン市にある軍政府学校（Military Government School）に通った。半年後の1945年4月には、中尉（軍政府の民政員）として沖縄に上陸している。沖縄では教育部に配置され、現沖縄市の桃原地区の監督官

を任された。その仕事ぶりに対して「青銅星章」（Bronze Star）を贈られている。同年9月にスナイダーは韓国に転属され、そこでは首都ソウル近辺の地域で550の学校を再開校させた。本国アメリカに帰国後、数多くのテレビ・ドラマの脚本や *the Saturday Evening Post* や *the New York Times Book Review* のような多くの定期刊行雑誌に書評、エッセイ、短編小説などを寄稿している。

沖縄滞在は、半年足らずという短い期間であったが、その時の実体験を基に書かれたのが、『八月十五夜の茶屋』で、スナイダーが34歳の1951年7月に出版された。出版当時、この作品はベストセラーとなり、スナイダーは、アメリカ中西部の若手の作家に送られる「アメリカ作家の友賞」（Friends of American Writers' Award）を受賞している。その後、スナイダーは、台湾を舞台にした政治色の濃い長編 *A Pail of Oyster* を1953年に出版し、また、韓国滞在の体験をいくつかの短編として出版していたものを編集した短編コレクション *A Long Way from Home, and Other Stories* を1956年に出版している。1960年には、再び沖縄を舞台にした *The King from Ashtabula* を出版し、1971年には最後の長編小説 *West of the North Star* という青少年向けの作品を出版している。Harvey Breitによれば、スナイダーは、アイルランドとスコットランドに関する長編小説を計画したり、地元ミシガン州の1890年から1954年までの経済的、社会的変化を扱った戯曲を執筆中であったようだが、いずれも未完に終わっている（Breit BR8）。生涯故郷のモンロー市に住居を構えていたスナイダーは、1981年に64歳の人生を閉じている²。

小説『八月十五夜の茶屋』の日本語翻訳版は、1956年に内村直也（本名 菅原実）によって翻訳され、早川書房から出版されていたが、あまり知られていない。ブロードウェイでロングランを記録した戯曲やマーロン・ブランドが、イエローフェイス（白人が東洋人の役を演じること）で出演した映画版に関する研究は、近年盛んになっているが、小説の研究はほとんど見当

たらない。しかし、2006年には、Mariko Yagi（屋宜真理子）が、琉球大学大学院で『八月十五夜の茶屋』をスナイダーの原作とパトリックの翻案の比較分析しながら、特に、ポストコロニアル理論を援用した論考を修士論文として提出している。また、与那覇晶子が2008年に小説版と演劇版の比較を通してジュリと辻文化を分析した論考を出しており、また、映画研究者の名嘉山リサも小説版と映画版の比較研究を2011年に出版している。さらに名嘉山のオリジナルの小説を単独で扱った論文が沖縄外国文学会機関誌 *Southern Review* No.27（2012年）に掲載されている。この論文では、ポストコロニアル理論のほかに、ミハエル・バフチンの「カーニヴァル理論」やホーミ・バーバの「ミミクリー理論」を援用しながら論じている。これらの先行研究成果を踏まえながら、次章以降に、小説とパトリック翻案の演劇・映画との差異を説明し、その比較から、オリジナル小説の分析を行い、戯曲・映画版とは異なるオリジナル原作の意義を検討していく³。

スナイダーの原作とパトリックの翻案の差異：芸者のイメージの脱セクシャリティ化

映画では1946年の沖縄が舞台となっているが、小説では、まだ戦争中の1945年の6月に設定されている。彼の伝記的な背景から、小説の主人公フィズビー大尉（Captain Jeff Fisby）は、スナイダー自身の投影だと考えられる（名嘉山「ティーハウス」141）⁴。小説ではフィズビーは、オハイオ州ナボレオンでドラッグ・ストアを営んでいる設定になっており、一方、映画では、大学の人文学科の准教授であったという点で、異なる点もあるが、基本的には同じ人物造形となっており、心が優しく、非軍人的な要素が強いキャラクター

である。吉村いづみは、映画版『八月十五夜の茶屋』のフィズビーのキャラクターに関して次のように述べている。

フィズビーは、アメリカ軍の正義に従って生きてはいるが、本当は自分が兵士に向かないと悟っている。だが、彼の心情は軍には理解されない。何故なら彼のような優しさや繊細さ、言い換えれば女性性ともいえる部分を兵士に認めてしまえば、戦争という侵略行為は成り立たないのであり、国民の戦争参加を基本として政策を進めてきた国家の理念が揺らいでしまう。（吉村 34）

吉村の見解は、小説のフィズビー大尉にも当てはまるだろう。民政員と実際の戦闘を行う兵士との差異は、極めて重要であり、女性的な（非男性的な）性格のフィズビー大尉という設定が『八月十五夜の茶屋』におけるアメリカ人の「現地化（going native）」を可能にしていることは、議論の余地がない⁵。また、スナイダーの小説における沖縄文化の表象は、正確とはいえないが、パトリックの翻案の劇と比較すれば、沖縄文化をできるだけ丁寧に描こうとした意志が伝わってくる。ステレオタイプ的な人物像がないわけではないが（沖縄人は眠ってばかりいるとかホッカイドウ・ヤマグチは子供のように目に涙を浮かべてばかりいるなど）、エドワード・サイードが理論化したオリエンタリズムは抑えられている。これは、スナイダーの沖縄の人々やアジアの人々に対する姿勢の反映であり、米軍批判のパロディだけでなく、他文化受容・理解の重要性を強調している。

小説と翻案の差異は以下のように大まかにまとめられるであろう。

スナイダーのオリジナル小説とパトリックによる翻案の相違点	
スナイダーのオリジナル小説	パトリックによる翻案（戯曲・映画脚本）
まだ日本本土戦争中の1945年6月	終戦翌年 1946年 梅雨の後
主人公：フィズビー大尉	主人公：沖縄人通訳サキニ、フィズビー大尉、芸者 Lotus Blossom の三人
フィズビーの体格は小柄で、太り気味。アメリカではドラッグ・ストア経営	身体の詳細はほとんどなし。アメリカの大学の准教授

沖縄人通訳者サキニは、22歳以下、丁寧な通訳・説明を心がける	沖縄人通訳者サキニは30～60歳、意図的な誤訳や、わざと通訳しないなど道化的な役割
フィズビー大尉への芸者プレゼント：First Flower と Lotus Blossom の二人	フィズビー大尉への芸者プレゼント：Lotus Blossom の一人
フィズビーは、First Flower とセイコーとの結婚の「中人」としての媒体的役割であり、フィズビーと Lotus Blossom との間に恋愛関係は見られない。	フィズビーと Lotus Blossom の恋愛関係がほのめかされ、セイコーとの三角関係の構図（フィズビーは、物語の最後に蓮の花から結婚の申し込みを受ける）
辻遊郭の詳細な説明がある（第七章）	辻遊郭の説明が皆無
農業や泡盛の他に、様々な職業（三味線製作所、大豆製造会社、畳製造所、美容院、洋裁店、風呂屋など）が有機的に機能	有機農業生産の他にブランデー（泡盛）を村の特産物として GHQ に販売し、大成功を収める
	破壊されたと思われていた茶屋が劇的に復活するどんでん返し（大団円）の展開

トビキ村の監督官、フィズビーに送られるプレゼントに二人の芸者が送られるという設定が、アメリカ人にとって東洋的なエキゾテックなエピソードであり、物語の中心として展開されていく重要な点となっている。映画では芸者は京マチ子演じるロータス・ブロッサム（蓮の花）となっているが、オリジナルの小説では、First Flower（一の花）と Lotus Blossom（蓮の花）の二人が登場し、一の花を一流の芸者、蓮の花を二流の芸者として設定している。この芸者のモデルは、『辻の華・戦後篇 上下』（1989）を書いた上原栄子であるというのが定説になっている⁶。実際、上原は演劇版の『八月十五夜の茶屋』のNYのブロードウェイ公演に招待されて、観劇している。宮城信行とのインタビューの中で、上原は、米軍に対して、「辻の再興が沖縄戦で生き残った者の使命だと公言して」いたとして、彼女は「軍政府の総務部にいましたが、スナイダーさんは教育部にいたんです。そんなに親しいという間柄でもないのに、私に興味をもったらしくいつの間にかモデルにされてしまって」と生前発言している（上原・宮城 57）。しかし、スナイダー自身が上原を小説の芸者のモデルにしたと明記した資料はまだ見つからない。私の推測では、そのような資料はないと思われるが、それはスナイダーが上原をモデルに小説の芸者を描いていないからだろう。Hervey Breitは、数年前に行われたスナイダーとのインタビューを振り返り、「彼の村にはフィズビーはいたが、芸者は

いなかった」というスナイダー自身の発言をメモにとっていたとあるエッセイに書いている（"He [Sneider] said fondly that there had been a Fisby . . . in his village, but he said wistfully that there had been no Geishas" Breit BR8）。おそらく、上原の米軍接待所としての辻遊郭の再興の要請は（上原110－119）、スナイダーにとっては、異文化接触の物語の着想（インスピレーション）に過ぎず、小説に登場する芸者 First Flower や Lotus Blossom 像は、上原がモデルというよりも、むしろスナイダー自身の脚色が大きく占めているように感じられる⁷。

重要なことは、演劇や映画に描写されている芸者は、明らかに日本本土の芸者であって、沖縄の辻のジュリ（尾類）ではない。映画の京マチコが歌う「さくらさくら」や彼女が舞う時の身体性は、芸者そのものを映し出していて、沖縄らしさは削除されており、多くの沖縄人はそのリアリティの欠如に違和感を持たずにはおれない（与那覇 15）。一方小説では、那覇の辻地区を説明する箇所があり、沖縄の辻遊郭・ジュリ文化を丹念に紹介していて興味深いが、ジュリという名称は一切出てこない。おそらくジュリといっても、アメリカの読者が分からないので、当時既に英語にもなっていた「芸者」を採用したのであろう。その言葉が持つセクシャリティのイメージを利用することがスナイダーのアイデアだったと思われる⁸。

しかし、スナイダーは、芸者の「セックス・ワーカー」

としての影の部分を除き、芸の部分に強調している。(沖縄にはほとんどなかった歌舞伎などの芸の部分が前面に出ている。) 映画では、その影の部分が戯曲や映画全体に暗示されているためアジア的なミステリアスな雰囲気を保っている。Alexandra Chung Suh は、フィズビー大尉と Lotus Blossom の恋愛関係を暗示する映画版は、性のイメージがこの物語の中心的な核として機能していると指摘する。

[I]n *Teahouse*, prostitutes and prostitution are central to development in Okinawa. In this manner, Asia is distinguished from other parts of the Third World, and development in Okinawa takes on gendered and racial dimensions specific to the region . . . Lotus Blossom, her relationship with Captain Fisby, and the question of her link to prostitute are at the crux of the narrative; the issue of prostitution impels nearly every significant development. *Teahouse* demonstrates that U.S. servicemen stationed in Asia just cannot escape military prostitutes, despite their earnest efforts to avoid them. (Suh 178)

Suh の指摘が示唆的なところは、アジアにおける米軍駐留には現地女性の娼婦としてのステレオタイプのイメージが、アメリカ人の潜在意識にアピールしたため『八月十五夜の茶屋』の大ヒットにつながった可能性があるというアメリカ人のオリエンタリズムを看破していることである。彼女は、"Through *Teahouse*, another Asian icon, the Lotus Blossom geisha, became a permanent entry in the American popular cultural lexicon." (Suh 178) であると映画『八月十五夜の茶屋』の芸者のイメージのアメリカ文化への影響を指摘している。

一方、小説では、フィズビー大尉と芸者間の恋愛関係はなく、「芸者＝売春婦」としての暗示は、ほとん

どないと言っていだろう。小説では、フィズビー大尉は、First Flower とセイコーとの結婚の手助けをする「仲人」としての役割を担っており、また、Lotus Blossom との間に恋愛関係が芽生えるわけでもなく、芸者との関係では一歩退いて、淡々と傍観者としての態度を貫いている。端的に言えば、小説では芸者二人のセクシャリティがほとんど削除され、アメリカによる占領地アジア女性の性搾取(実らないロマンス的な関係)という構図が転倒されているのである。小説のこの点が最もファンタジー的要素の一つとなっている。つまり、芸者の脱セクシャリティ化である。スナイダーは芸者を文化の核として美化することで、アメリカの兵士によるアジア女性の性の搾取に対する批判を、暗にほめかしている。それは非占領国としての日本(沖縄)を女性化すべきではないことを警告として機能するメッセージである。軍の売春システムは、被支配者を占領植民地の従属的地位に固定し、ジェンダー化する欲望の縮図であることをスナイダーは見抜いていたのではないだろうか。そのためには、まずステレオタイプ化されている日本の「芸者ガール」のイメージを払拭しなければならなかった。「芸者」は「売春婦」ではないと描写する必要があったのである。

また、もう一つのファンタジー的な側面として、トビキ村の復興が挙げられる。マクリーン医師(Doc McLean)が率いる農業生産やブランデー(焼酎・泡盛)生産だけでなく、様々な職業(大豆製造会社、畳製造会社、美容院、洋裁店、風呂屋など)が有機的に関連し合い、村の経済が、茶屋経営を中心として物々交換の原始的な経済から軍票を基にした貨幣システムへとほとんど自然発生的に移行していく様子が描写されている。特に、最終章において、フィズビーの仕事ぶりを偵察に来たパーディー大佐に村の様子を詳細に説明するとき、村の経済的復興が順調なので、頑固なパーディー大佐も、フィズビーの説明を徐々に受け入れて行く方向に向かう。映画のエンディングのどんでん返しのような破壊されたと思われていた茶屋が劇的

に復活するような展開は、小説にはない。しかし、このような短期間のうちに物事がたやすく進行する状況は、スナイダーの強い願望・理想が反映されており、戦禍に見舞われ焦土と化した沖縄がこのように速く復興を成し遂げることは非現実的である⁹。このようなアメリカの楽観主義的な面も、この小説がファンタジー的であると見なされた所以であろう。しかし、そのようにこの物語をファンタジーとしてとらえる見方に対しスナイダーは違和感を覚えていたようで、小説で描写されていることの多くは実際に起こったことであると発言している ("The military government administration followed the pattern of "A Bell for Adano" It bothers me when my book is called a fantasy . . . because most of the things in it happened just as they did in real life." [Butcher H7])。小説と戯曲・映画の脚本を比較すると、両者には大きな差異があると考えた方がよいのではないだろうか。

原住民化するアメリカ兵：スナイダーの隠された意図

スナイダーは、ブロードウェイ上演が成功した際に、The New York Times の掲載した "Below the Teahouse" というタイトルのエッセイの中で、『八月十五夜の茶屋』には表面的な物語と隠れている物語が同時進行している、と語っている。

At the risk of sounding presumptuous, I would like to mention that the under story of the "Teahouse" was also intended as a guide for those who someday might be engaged in military Government work. I remember back in those days of 1944 when the United States Army began to find itself in the Military government business, many of us, assigned to such work, were at a complete loss. . . .

Consequently, should the occasion arise (and I hope that it doesn't), still,

perhaps the "Teahouse of the August Moon" might be benefit to some United States Military Government officer, somewhere, sometimes. Perhaps it might show him that if he looks to the wants of the people under him, then tries to satisfy those wants, he will have very little need for barbed wire and guards armed with rifles. Perhaps it will show him, among other things, that what works in Pottawattamie, Iowa, often will not work in Tobiki village; that Plan "See" is much better than Plan B. The culture and way of life of an occupied country is often very old and, strangely enough, ideally suited to that country. And that there is more to be learned in this old world that will ever be taught in a pentagon-shaped schoolhouse. (Sneider "Below the Teahouse" XI)

このエッセイの中で、スナイダーは、人種が異なっても人間の欲望や欲求は本質的には同質であることを認識することが重要であるとし、現地人の人々の目線から占領政策・統治を行うことを小説の中で提案し、コミュニティの復興には、アメリカ民主主義を押しつけるのではなく、現地住民が要求するものを提供することが大事であると示唆している。これは彼が軍政府学校時代に読んだ John Hersey の第二次世界大戦のイタリア占領を題材にした小説 *A Bell for Adano* (『アダノの鐘』1944) のテーマに通底し、人々の欲求を満たすことによって平和が訪れ、保たれるという考え方である。アメリカ人が信じている自由・民主主義などの概念は、沖縄住民として、まだなじみがないもので、戦後復興計画では、そのような異文化の概念よりも住民が文化的に大切にしてきた習慣や伝統を求めるのは極めて自然なことであろう。

戦争の敵国であった敗戦国の占領下にある住民の希望を優先して取り入れることをアメリカ人読者に納得

させるためには、どうすれば良いのだろうか。スナイダーがとった方法は、沖縄住民が、アメリカ人のように、合理的で、仕事熱心な民族であると描写する代わりに、読者に、アメリカ軍がいかに不合理なほど愚かな輩であることを提示することであった。小説の第一章では、主人公のフィズビーや沖縄人通訳者のサキニは登場せず、本国アメリカにいるパーディー夫人に頭があがらないパーディー大佐 (Colonel Wainright Purdy III) のエピソードで占められている。大佐は、本国では製紙会社を経営する二代目社長で、彼の体型は典型的な軍人らしい風貌を持っているとして描かれている。夫人から将軍に昇格することを期待されている大佐は、そのためだけに軍政府の仕事をしており、低俗な雑誌『アドベンチャー』を購読する利己的で、現実感覚のないアメリカ人であるとして描かれている。スナイダーは、彼の上司であった Brig. Gen. William E. Crist をモデルにパーディー大佐像を創りだした。小説の中で、指令書に沖縄住民を「敵国住民」として書かれているが (Sneider *Teahouse* 6)、この表現は、クリスト准将が、日系アメリカ人の通訳者の目の前で、日本人の知性や信頼性に関して「彼ら (日本人) を信用するな」 ("Don't trust these people.") と言った人種差別的なエピソードを想起させる (Sarantakes 29)。

この小説で重要なのは寓意的な象徴性である。トビキ村の復興計画にアメリカ民主主義を浸透させる目的で学校建設を計画しているが、この学校の建物の形が、ペンタゴン型というのが修辭的なシンボリズムとして、アメリカ及びアメリカ軍を暗示していることは明らかであろう。しかし、トビキ村の人はそのシンボリズムをやんわりと拒否し、その代わりに、沖縄の文化・社会を象徴する「茶屋」を建設することを要求する。テッサ・モーリス・スズキは、小説『八月十五夜の茶屋』に言及して、沖縄住民は「デモクラシーなど欲しくなくて、その代わりに蓮が咲く池がある芸者お茶屋に象徴される「伝統」を維持したい」のであると指摘している (吉見・テッサ 121)。新しい概念の民主主義よ

りもよりなじみのある沖縄の文化や伝統の方が地元住民にとって意義のあるものであり、占領者に対する沖縄へのソフトな抵抗を示唆していることは注目に値する。

小説に沖縄の声を反映するという意味で、映画でマロン・ブランドが演じた沖縄人通訳者サキニ (Sakini) は、スナイダーにとって重要なキャラクターである。この物語の核心は、戦勝国アメリカ人フィズビーが、文明が劣っていると思われる側への原住民化 ("Going native") にあるが、沖縄の文化や伝統に無知な日系アメリカ人通訳では成立しない。映画では、サキニは、都合の悪いことを通訳しなかったり、あるいは、故意に誤訳したりするが、小説のサキニは、そのようなことは全くなく、沖縄の文化や習慣などを丁寧に通訳して、説明している¹⁰。特に、第七章における那覇の辻遊郭の説明は、フィズビー大尉が茶屋の建設を承認する際の重要な場面となっている。トラベル・ライティング (旅行記) 的な要素があふれるこれらの異文化の詳細な記述は、Mariko Yagiが指摘するように、スナイダーが沖縄の伝統文化に敬意を払っていた証拠であろう ("Patrick . . . does away with the deeper message by deleting the introspection and stresses the satirical humor On the other hand, in Sneider's novel, there are many detailed descriptions of Japanese culture like gardens, tea ceremony, and sumo. From this, we can see that Sneider pays respect to other culture." [Yagi 38])。

沖縄の読者の多くは、スナイダーのトビキ村の描写が、戦火の様子が全くなく、あまりにも牧歌的過ぎて、また、沖縄文化と日本文化の無理解からくる混同が顕著な演劇や映画に翻案された『八月十五夜の茶屋』の印象が強烈すぎて (小説を読むことなく) 原作の小説を軽視、あるいは無視してきたのではないだろうか。学校の代わりに、芸者のために茶屋を建設することを沖縄が切望するという設定が、沖縄への侮辱にあたるかと判断してしまった映像の影響はあまりにも大きすぎ

たと思われる。このような状況を端的に示す評価は、米須興文による見解である。

ヴァーン・スナイダーは、異文化接触における当事者間の願望と要求のすれ違いをよく認識していました。そして、『八月十五夜の茶屋』でこの擦れ違いを取り上げ楽しい文学的表現を与えました。しかし、彼は、肝心の沖縄人を十分に観察もしなければ、理解もしませんでした。この作品がアメリカと沖縄の間に起きた稀有の異文化接触の意味を本質的な次元でとらえるに至ってないのはそのためです。取り上げられた文化摩擦が、学校の建設か（教育の娯楽の二者択一）をめぐる争い、いざこざという、実際に在りもしなかったし、在りうるはずもなかった出来事だったことは作品にリアリティを失わせ、読者に訴える力をおおいに弱めています。（米須 347-48 下線部強調筆者）

スナイダーが沖縄人を充分にとらえていないと断言する米須の分析は、温情的なアメリカ文化・価値観の押しつけよりも、沖縄文化に敬意を払っているフィズビー大尉の行動の真意を見落としているといわざるを得ない。例えば、小説におけるフィズビー大尉の異文化への敬意を端的に示すのは次の引用である。

Miss Higa Jiga was before them now, and he gave them a walking bow. "Ohayo gozaimas," she said.
Fisby tipped his helmet-liner and smiled. "Ohio."
Colonel Purdy regarded him. "What's this Ohio business?"
"Ohio means 'good morning' in Japanese, sir."
"It does? Well, why don't you teach them some English?"
"They speak a few words, sir. They are learning. And I am learning a little of their

language." (Sneider *Teahouse* 264)

日本語の挨拶「おはよう」と「オハイオ」州の発音の類似を利用したさりげないコミカルな会話となっているが、沖縄人でも "Good morning" のような簡単な言葉は覚えられるはずで、英語の挨拶でも十分に問題はないのに、現地人の言葉を覚えようとするフィズビーの姿勢は現地の文化に敬意を払っていることを示している。パトリックの翻案とは異なり、原作では、「学校建設」と「茶屋建設」をめぐる争いは、ほとんど見られず、逆に茶屋は地域復興の原動力として活用され、それから派生する様々な産業やビジネスが誕生しており、小説の終盤にかけて、フィズビー大尉は、沖縄人の主食であり、村の復興には欠かせない大事な「米」の確保に奔走する様子が描かれている。米須の分析は、ストーリー全体に横たわる「学校」と「茶屋」建設のいざこざをメイン・モチーフにしたパトリックによる翻案・映画に関する分析にはかならず、トビキ村の復興のプロセスを描いたスナイダーの原作には当てはまらない¹¹。

小説の軍隊への風刺的な要素からも明らかのように、スナイダーは、アメリカの温情主義的な占領政策に対し、批判的であるが、これは、沖縄の復興にアメリカの介入がなくても良いということを意味しない。「鉄の暴風」のあと焦土となってしまった戦場をどうにか復興させるという任務を任されたとき、住民にとって自らが「侵略者」の立場であることを忘れることなく ("Now, for the first time, he [Fisby] realized that he, too, was an invader placed over them" [Sneider *Teahouse* 168])、黒人奴隷を解放したリンカーン大統領のような偉大な存在ではないが、真の「解放者」として振舞うべきであると考えている (Sneider *Teahouse* 232)。つまり、フィズビー大尉は、「アメリカの良心」あるいは「解放者」とであると同時に、米軍政府が軍事占領のために沖縄住民の土地を奪い取った「侵略者」でもあるという二重のアイデンティティの事実をしっかりと受け止めている ("It was the

people who lost their land and the people who were just shoved in to the village, because of invasion, that bothered him. He'd have to find some way for them to make a living." [Sneider *Teahouse* 225]。スナイダーは、占領者は住民を未開の民族・非文明的な民族と見做して占領側の価値観を温情的にあるいは恩着せがましく押し付けるのではなく、現地住民の望むもの、必要とするものを与えるべきである、とする教訓をフィズビー大尉に投影し、自らの実体験をメッセージ化しているのである¹²。

第二章の描写で、彼の体型が軍人としてではなく、サンタクロースとして最もふさわしいと描写されている箇所は、この小説の伏線となっており、被占領住民に対し、見返りを求めないサンタクロースの役割がフィズビー大尉には投影されている¹³。しかし、同時に物を与えるだけのサンタクロースでは、不十分であるということをスナイダーは、フィズビーの声を通して語らせる。

And his mind was on the Japanese military rations hidden in the caves. While he appreciated this windfall, still it worried him. For they remained him of the Christmas baskets passed out to the needy during the Yale season. For one day the hungry feasted, but after Christmas what? He glanced out at the Pacific, just beyond. The sea would always be there, supplying its proteins. Yet the land, too, ought to produce the grains and vegetables in variety to help relieve the monotonous diet of sweet potatoes and soy beans. (Sneider *Teahouse* 113)

スナイダーは、戦後復興には、持続可能な経済体制を確立させることが、重要であるということを熟知していたのであろう ("I [Sneider] think that just as that [Tobiki] village was built up, Asia must be

built up" [Butcher H7])。

無視されたスナイダーの願い：占領政策にとって危険なテキスト

第二次世界大戦へのアメリカの参戦は、「ホーム」を守るために戦っているという気持ちを兵士たちに抱かせることによって正当化されていった。そのため「アメリカの生活様式」(American Way of Life)を守るためにこの戦争は必要なのだと米国戦時情報局(OWI)は定義していた。米国国防総省映画局(the Bureau of Motion Pictures)はハリウッド映画の内容を決定し、広告協議会(the Advertising Council)は、戦争債の宣伝や戦争中の食糧不足を補うための家庭菜園などの銃後支援(home front support)を動員させ、メディアの戦時情報規制と検閲はアメリカ全土に拡がっていく(O'Brien 244-45)¹⁴。このようなアメリカ国民のコンセンサスの下、スナイダーが描いた占領下の『八月十五夜の茶屋』の牧歌的な非文明化の原住民の社会が、アメリカの民主化政策を逸脱して復興していく様子は、どのように受け止められたのだろうか。当時の書評に目を通すと、好意的な書評が多く、そのほとんどが、米軍への風刺を巧妙に描いた上質のコメディとして評価が高い。しかし、スナイダーが自身のエッセイに書いた「隠れたメッセージ」を読み取っていないことが分かる。Mariko Yagiは、その理由としてアメリカ国民が人種差別や植民地主義を認識できず、コメディとして理解されたため、深い分析が行われていないため("One reason for looking this moral side to the novel is that the American public did not recognize its post-colonialism and racism. As a result, the novel was described as a comedy, rather than as didactic work the way Sneider envisioned it, thereby no further analysis was required" [Yagi 16])とコメントしているが、その中で例外的なのは、*The Washington Post* (3 June 1951)に掲載されたStarling Northによる書評である。

There seem to be at least three morals to this philosophical tale, none of them actually mentioned by the author.

1. There is more to be learned in this world than will usually be taught in a pentagon-shaped schoolhouse.

2. Americans may finally discover that some of the ancient cultures they view with patronage contain traditions and techniques of lasting value.

3. The way to get human beings to work is to offer them satisfaction they understand, even if such satisfactions turn out to be the drinking of tea with geisha girls, the arranging of the flowers and the painting of porcelain.

This charmingly written and amusing novel may be enjoyed as an evening's light entertainment. But it also carries a serious and significant undertone of penetrating criticism which should not be missed or misunderstood by future American advisers and administrations in our new and unaccustomed international role. If the Pax Americana is to succeed, we will need hundreds of thousands of Fisbys and very few Purdys. (North *Washington Post* B7)

(1) この世の中にはペンタゴン型の学校で学ぶよりも多くの学ぶべきことがある。(2) この小説からアメリカ人は、永続する価値のある伝統や技術が古風な文化に含まれていることをようやく発見できるかもしれない。(3) 人を働かせるためにはまず、その人たちが満足感を得られるものを提供しなければならない(たとえそれが、芸者と一緒にお茶を飲むこと、生け花、お皿に絵を描くことであったとしても)。ノースは、パクス・アメリカナ(「アメリカ支配による平

和」)が続くには、軍事的な支配ではなく、フィズビーのような異文化を理解し、尊重する人物が必要であると小説のメッセージを的確に捉えている。しかし、現実には、軍事優先の軍政府の沖縄統治では、スナイダーの小説の教訓が生かされてこなかった。それどころか、小説のメッセージは無視され、プロパガンダ的に利用される危険性を生みだした。スナイダーの故郷モンロー市に近いデトロイト市の新聞(*The Detroit Free Press*)には、ブロードウェイ演劇版の大ヒットを受けて次のように書かれていた。

What Vern Sneider has done is to tell a story that should be propagandized through every medium at our command, which is the true story of what America, and Americans, have been trying to do since the second war ended. The bumbling Capt. Fisby was eventually able to give the little town a stable economy, a farm trade balance, a sound currency system, good government, and a shared pride in achievement. He did this with simple American small-town know-how, where you traded what you had for what you wanted, and encouraged the people around you to compete. He restored hope and industry to the old, and was able to keep the young in line. He listened to complaints, and went ahead to accomplish one thing at a time. (Ruark, qtd in "Sneider, Vern" *Current Biography* 589)

引用部分の後半にあたるRuarkによるフィズビーの行動に関する説明は正確であるが、スナイダーのフィクションの世界は、アメリカが第二次世界大戦後に推進した民主化政策の真実のストーリーではない。確かに、スナイダーは、沖縄滞在中に小説にでてくるエピソードを実践し、その実体験を下敷きにして、小説を執筆

したことは疑いがない。しかし、それはアメリカの占領政策の典型ではなく、逆に例外的な事例だった。つまり、アメリカ軍政府は、スナイダーの教訓や示唆を無視しているにもかかわらず、ルアークが提案したように、実体のない『八月十五夜の茶屋』の世界を米軍占領支配のプロパガンダとして利用（悪用）したのである。その現実とのギャップは、「暗黒時代」¹⁵といわれた沖縄社会に住む当事者の住民にとっては許しがたいことだったであろう。「アメリカが『八月十五夜の茶屋』の教訓を生かしていたら、米軍車両が七十台余も焼かれた一九七〇年の「コザ暴動」は発生しなかつた筈です」（米須 346-47）と指摘する米須の見解に同意せざるを得ない。

小説『八月十五夜の茶屋』は、異文化を扱った心温まるやさしいテキストである一方、アメリカ占領政府にとっては、アメリカの理念や占領統治の軍事的目的を崩壊しかねない非常に危険なテキストでもあった。そのように考えると、現実的な描写がありつつも現実離れしている矛盾にも似た特質をもつポストコロニアル的な小説『八月十五夜の茶屋』は、精読に値するテキストであり、名嘉山が戦後の沖縄表象が非現実的であると無視するのではなく、「理想的な民主主義の概念」を読み返す意義があるのではないかと指摘しているように（名嘉山「ティーハウス」152）、ファンタジー的な物語の空間に隠された著者スナイダーのメッセージを読み抜く努力は意義があると強調したい。

結語にかえて：

中秋の名月は、秋の月であり、First Flower を悲しませる、という。何故なら、秋の月は、これから冬に向かって年が死んでいき、人々もその土地も死んでゆく運命であることを教えているからである、とサキニは通訳している（Sneider *Teahouse* 230-31）。人生は、哀しみにあふれている。特に、戦争がもたらす悲しみは、いっそう悲哀を帯びている。しかし、人生をあきらめるわけにはいかない。そのような現実（人生）の暗い負の部分の部分を十分に理解しつつ、その悲しみや苦

しみを心に秘める孤独な人々を癒す空間としての茶屋が「中秋の名月の茶屋」なのだろう。タイトルの『八月十五夜の茶屋』は、上原栄子が推察するように単に音の響きが良かったからではなく（上原・宮城 58）、中秋の名月の美の中に潜む冷たい死にゆく運命を忘れる束の間の瞑想を意味しているのではないだろうか。また、この日本語のネーミングは、新暦の終戦記念日の8月15日を連想させるものであるが、スナイダーがタイトルに中秋の名月の旧暦8月15日と終戦日の新暦8月15日と重ね、暗示させているとすれば、彼の平和への祈りが込められていることも推測できるだろう¹⁶。

スナイダーは1950年代前半にインタビューされた際、毎日小説を書いている、と答えてインタビューアを驚かせた。彼の小説は、異文化を扱ったものが多く、彼の実体験が基になっているのは間違いないが、単なるトラベル・ライティング的な書き物の枠を超えて、彼の文学的想像力を駆使することが重要であった。それはスナイダーにとって、自分自身の実体験をフィクション化するという作家の醍醐味だけでなく、人生哲学を反映させる・表現するという創作の真髄を意味している。また、同時に、スナイダーはノンフィクションでは描ききれない、読者の心に訴えかけるフィクションの可能性を信じていたようだ。中国国民党支配下の台湾を舞台にした第二作目の *A Pail of Oyster* (1953 年) について *Okinawa: the History of an Island People* (1958) の歴史書を執筆した台湾研究家 George H. Kerr へ宛てた手紙で、彼は次のように書いている。

In this novel on Formosa [Taiwan], I hope to lay bare the entire situation. The situation there lends itself well to fiction. And I think fiction, in this case, can do something which no work of fact can do—namely, fiction allows for that thing called emotional pull, and a writer can reach the feelings of the reader, along with an appeal to the mind. (Sneider, qtd in Benda 52)

同時期に書かれた『八月十五夜の茶屋』においてもスナイダーは、米軍の海外外交（占領）政策に対する彼の政治哲学をテキストに託したと考えるのはあながち間違いではなく、彼の小説には政治的な側面があることを看過するべきではないだろう。そのような観点からスナイダーの原作の再評価は必要性があるが、特に次の点は重要であろう。（１）基本的にオリジナルの小説と翻案されたパトリックの脚本（映画）は、「似て非なるもの」であるので、同一視するべきではない。（２）この作品をコメディタッチな非現実的フィクションとして切り捨てるのではなく、原作は、米軍への批判となる風刺よりも沖縄住民への救済政策及び占領者としての態度に重点があり、米軍の方針とは相容れない軍内部批判の側面を持つ政治的なストーリーとして再読する価値のある作品である（ポストコロニアル批評・ジェンダー批評などが有効になるだろう）。（３）南国の占領地域であればどこでもいいようなパトリックの脚本とは違い、実際に沖縄滞在経験のあるスナイダーの作品を精読し、沖縄人・沖縄文化の独自性を解明するべきである。（４）本来はノンフィクションのジャンルの一部であるトラベル・ライティングとして分析することは重要となるだろう。なぜならスナイダーの『八月十五夜の茶屋』には、これまで「帝国の修辞」（"a rhetoric of empire" Spurr 1993）として植民地拡大に利用されてきた、あるいは加担してきた従来の西洋の旅行記に一石を投じるような新しい種類のトラベル・ライティングの可能性を秘めているからである¹⁷。

小説『八月十五夜の茶屋』の今後の研究課題としては、スナイダーの沖縄滞在で出会った人々が小説化の過程でどのように利用されていたのか、を解明できればさらなる研究が進むだろう。小説が捧げられているイニシアル M.H.も今後の研究に重要になるかもしれない。また、スナイダーが沖縄に対してどのような視座を持っていたかを知るためには、沖縄を舞台にしたもう一つの長編小説 *The King from Ashtabula* (1960) も分析対象に加えていかなければならないだろう。こ

の作品においても、米軍政府が沖縄を統治しており、アメリカ民主主義を浸透させようと試みるが、選挙（住民投票）によって、日本併合以前の君主制に復帰したいという地元住民の民主的選択が軍政府高官を大いに悩ませるというプロットである。この小説にも沖縄住民とアメリカ軍に関する『八月の十五夜の茶屋』と同様なスナイダーの政治スタンスが反映されている¹⁸。

スナイダーは、あるインタビューで、「沖縄とそこに住む人々への生涯変わらぬ愛着があり、いつの日か必ず沖縄への再訪を強く希望」（[Sneider] "declared his everlasting affection for the people and the place, as well as his resolution to return." Breit BP8）していた。私のリサーチでは、スナイダーが、1946年以降、沖縄に戻ってきたという確かな情報はないが、彼が沖縄を再訪していたという資料が発見されれば、さらなる深化された研究が期待できるであろう¹⁹。

注

¹ 訳者は、沖縄在住の梓澤登で、彩流社から出版されている。巻末にはヴァーン・スナイダーが『ニューヨーク・タイムズ』に執筆したエッセイ「茶屋の下にながれるもの」が和訳されている。新訳の特徴としては、現代語訳になって読みやすくなっている以外に、各章に原作にはないタイトルが付けられており、さらに内村訳では「一の花」と「蓮の花」となっていた二人の芸者の名前が、それぞれ「初花」と「蓮華」に変更されている。

² スナイダーの経歴・伝記的情報は、Popp, Breit, *Contemporary Authors Online Gale Library Databases*等を参考にした。

³ 小説に関する書評として作家の大城貞俊は「沖縄の終戦直後の人々や世相を描いた作品で興味深かった。しかし、小説としては面白いとは言いがたかった。（中略）なるほど、郷に入れば郷に従えで、占領地区の文化や歴史を理解しようという姿勢には共感できる。しかし、それではこの作品が沖縄の習慣や民衆の価値観をも表しているかとなると大いに疑問が

残る。この作品をこの視点から判断するには明らかにもう一つの尺度が必要となるだろう」と評している（大城 11）。「もう一つの尺度」が具体的に何を指しているのかこの書評からはわからないが、大城の評価からこの作品が実際に沖縄に6か月滞在したスナイダーによるアメリカ人としてのトラベル・ライティングの可能性があることがわかる。

⁴ 川平朝申によれば、フィズビー大尉のモデルは、1954年の米国総領事であったマーフィン氏であるという（川平 375）。

⁵ Going native（原住民化・現地化）は、基本的には文明の進んだ西洋人が植民地など南の遅れた原始的な、未開の文化や習慣に同化することによって「退化」することを意味する。特に（1）原住民の女性との異人種間の性的接触が白人の血統の神聖さを汚すという植民者側の恐怖と（2）原住民の儀式や慣習（衣食住や余興を含む）に参加することを指す（Ashcroft, Gareth and Tiffin 115）。『八月十五夜の茶屋』の現地化は、後者のケースである。特に小説の前半を通して、フィズビーはコーヒーが飲みたいと、言い続けるのだが、物語が進行するにつれてコーヒーを求めなくなり、沖縄のお茶を飲むのを楽しむようになる。そのような変化も顕著な現地化の例であろう。第10章でフィズビーが将校クラブの若い少尉に将校クラブの内装として畳を敷いたり、竹製の板すだれをかけるという現地式（native style）を提案する時、少尉は、「素晴らしい雰囲気になりそうですね。フィズビーさん、ほとんど現地風ですね」（"It would make a splendid atmosphere, Mr. Fisby. Almost like going native" [97]）と返答する。実際にフィズビー以外にも物語が進行するにつれて、軍医のマクリーン（Doc McLean）やパーディー大佐なども次第に現地化していく様子が描写されている。

⁶ 上原栄子の『辻の華 戦後篇 下』には、次のようなエピソードが紹介されている。辻の再建に奮闘していた上原に、ルイス准将が「君は、ティーハウスを建設中だというけれど、いまアメリカでは、米軍の

沖縄行政を主題にした『八月十五夜の茶屋』という本が、ベストセラーになっている。君も知っているだろうが、軍政府に働いていたミスター・スナイダーが、長い間軍政府の中で暴れ回っていたお前をモデルに書いたのだと僕も聞いたが、この名を君の料亭につけたらどうだ」と提案している。上原は料亭の名を古くから由緒ある「松乃下」を採用したが、英語名としてアメリカ人が発音しやすいように Teahouse August Moon と名付けている（上原 84）。

⁷ 与那覇晶子は、上原栄子のライフストーリーの記述やインタビューを根拠に、スナイダーの作品が辻遊郭出身の上原をモデルにし、彼女と米軍当局との辻再興や米軍接待所に関するやり取りが小説の原案であり、「スナイダーが、辻再興に夢を求めていた異質な美しい上原栄子のエネルギーに魅了されたことが『八月十五夜の茶屋』を生み出した大きな契機であったことは疑いようがない」（与那覇 15）と強調して、原作へのジュリ上原の影響をみている。

⁸ 江戸幕府が初めて参加した1867年のパリ万博において、パビリオンに芸者が働く「茶屋」を出展したことで、フランスを中心に「ジャポニズム」ブームが起きたのをきっかけに、geisha は日本の代表的なイメージの一つとなった。The Oxford English Dictionary Vol. VI (2nd Edition) によれば、英文文書におけるgeishaの初出は、1891年であり、20世紀に初頭には英語の単語として定着したようだ。ちなみに、1896年 The Geisha, a story of tea house (Hall & Greenbank作) というミュージカルがロンドンで上演されており、1910年のイギリスの百科事典では、geishaは、"...strictly the name of the professional dancing and singing girls of Japan. The word, however, often loosely used for the girls and women inhabiting Shin Yoshiwara, the prostitutes' quarter of Tokyo" (OED 419) と定義されており、売春婦のイメージも紹介されている。

⁹ 宮城悦二郎は、映画版を評して「フィズビーやマッ

クリーン大尉のような人間は、グック・ラバー (Gook lover) として軍政府から追放されていたであろう。その意味では、米軍の「自らそうありたいと思う理想的な姿」を描いたということもできる」と評し、米軍統治の実態とはほど遠い、非現実的な作品であると指摘している (宮城悦二郎 340)。Orville Prescottはこの小説を「偶然に創造されたユートピアの架空の話」("tale of accidentally created utopia" [Prescott 21]) と評している。

¹⁰ スナイダーの創作のモデルとなったと言われている上原栄子の娘、保坂アイヴァーは、『八月十五夜の茶屋』の占領軍の沖縄人通訳を佐々木 (Sasaki) と言及しているが、これは、単に勘違いなのか、それとも実在した沖縄人通訳のモデルとなった佐々木という人物なのか大いに興味をそそられる。サキニ (Sakini) とササキ (Sasaki) は、発音が確かに似ている (保坂 3)。

¹¹ ペンタゴン型の学校建設の代わりに茶屋の建設が設定されているのは、茶屋に売春宿のイメージが付与されており、それはもっともアメリカ政府権力の対極にあるもの、つまり反体制的であるからだ、と、山里勝己琉球大学教授は指摘している。「上映会 & シンポジウム『八月十五夜の茶屋』の変遷—小説から演劇・映画の受容まで—」(2011年9月10日、於沖縄県立博物館・美術館講堂) における発言。

¹² C. ダグラス・ラミスの定義によれば、「未開発」は「野蛮人」言い換えた表現という。「未開発」とは単純に西洋・アメリカと「同じ物を持っていない」という範疇に属する国々のことであり、ヨーロッパ・アメリカの経済圏に組み込まれていない国や地域は全て「未開発」のグループに範疇化されているという (ラミス 92-94)。パーディー大佐が、沖縄をアメリカ化しようとするのに対し、フィズビーがそのような考えを持っていないことからわかるように、彼が沖縄人の考え方や価値観を理解し、尊重していることは明らかであり、典型的な白人中心主義的なアメリカ人ではない。

¹³ スナイダーは、『八月十五夜の茶屋』が出版された同年12月に "How Ladies of Okinawa Met Holiday" というとても短いストーリーを *Chicago Daily Tribune* (December 9, 1951) に寄稿している。そのエピソードでは小説内のキャラクターが登場し、終戦後の沖縄でクリスマスの準備をしているが、フィズビーは、ぽっちゃりした顔つきで、彼の出身のオハイオ州の町 Napoleon 周辺ではフィズビーがこれまでのサンタクロースの中で最高である、と常に評判になっていたことを思い出す、という描写がある。

¹⁴ 映画のサキニを演じたマーロン・ブランドは、1956年に『八月十五夜の茶屋』と『サヨナラ』(1957年)という終戦後の日本を舞台にした映画に立て続けに出演したが、その映画撮影の前にアジアを旅して、そこで目にしたアメリカ軍の態度を激しく批判している。アメリカ人駐留部隊は、現地人と交流することもなく、アメリカ式生活スタイルを続け、現地人のために人道的な財政支援をしているとは到底思えない、とブランドは回想している (Brando with Lindsey 234-35)。

¹⁵ 中原俊明は、米軍統治時代の高等弁務官時代、つまり憲法が適用されない時代を「暗黒時代」と定義している。「沖縄では、人権を守る憲法が存在せず、いわば、憲法の空白地帯に放置されたまま、戦後二十七年間もの間米国の統治下におかれた。専門家は、これを「暗黒時代」と呼ぶ……。憲法不在の暗黒時代に何が起こったか、民主主義のチャンピオンをもって任ずる米国は為政者としてその名に恥じることもなかったのか、沖縄の住民はその歴史の目撃証人となった」(中原 48)。『新聞三十年 沖縄タイムスが生きた沖縄戦後史』には、「一九五四年は米軍が徹底的に沖縄統治で弾圧政策を強行した年であった。このころを「沖縄の暗黒時代」とする見方がある」(沖縄タイムス編集委員会 48) と書かれている。

¹⁶ 川満達也は、タイトルが終戦記念日8月15日を想起させると指摘している (川満 111)。しかし、英文

のオリジナルタイトルには、15という数字はないので、スナイダーが太平洋戦争の終戦記念日を暗示するために意図的な選択をしたのか、現時点で判断は難しい。

- ¹⁷ ヨーロッパには『ドン・キホーテ』（カバンテス・セルバンテス1605-15年）、『ロビンソン・クルーソー』（ダニエル・デフォー1719年）、『ガリバー旅行記』（ジョナサン・スウィフト 1726年）などフィクション系の旅行記の歴史は古いが、私が依拠するトラベル・ライティングは、旅行記の成立や目的は帝国主義の植民地政策と不可分な関係性があったという1990年代以降のポストコロニアル批評による研究成果である。例えば、Douglas Ivion によれば、旅行記は、帝国主義の文化的副産物で、その著者たちは探検家、兵士、行政官、宣教師、ジャーナリストであり、旅行を続けるために帝国主義体制の支援に頼っていた、と指摘している（"The genre of travel writing... was cultural by-product of imperialism, often written by those actively involved in the expansion or maintenance of empire (explores, soldiers, administrators missionaries, journalists), and dependent upon the support of the institutions of imperialism in order to facilitate the writers' travels." [Ivion 200-201]）。トラベル・ライティングとは、遠く離れた異国の地を西洋中心の「帝国主義の眼」がフィルターとなって記述される言説であると指摘する Mary Louise Pratt の *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (1992年、第2版2008年) は、とりわけ重要な研究成果である。紙幅の都合で追求できなかったが、スナイダーの小説が内包するトラベル・ライティングの新たな地平の可能性は今後の研究課題としたい。

- ¹⁸ Herbert Kupferberg は *New York Herald Tribune Book Review*. (November 6, 1960) の書評において *The King from Ashtabula* では、"Sneider reserves most of his affection for the islanders (Okinawans) and most of his satirical jabs for

the military men" (*Contemporary Authors Online Gale Library Databases* Accessed 05/11/2011)と述べており、スナイダーの沖縄の人々への愛情と軍人への諷刺が読み取れるこの作品と『八月十五夜の茶屋』の類似性は明白であろう。

- ¹⁹ 川平朝申著『終戦後の沖縄文化行政史』には、1947年2月14日の米国の国会議員と新聞記者団の歓迎演芸会の演目を上原栄子が演じたが、彼女の演技をスナイダーが観劇していたと記されている。「その将校のなかに、東洋人が花を女の名にすることに興味をもった文学将校がいた。のちにニューヨークのブロードウェイで上演して成功した『八月十五夜の茶屋』の原作を書いたシュナイダー少佐 [原文のママ] である。登場する女性に桜、梅、花、藤、菊、百合、すみれなどをつけているが、[スナイダーが] 女主人公には「ロータス（蓮）」と名付けているのは、この日のカメちゃん [上原栄子] の舞台姿にヒントを得たらしい。」(川平 90) これが事実であれば、1945年9月に沖縄から韓国に派遣された後、スナイダーは、沖縄に再訪問したということになり、その滞在を機に沖縄の文化事情を丁寧に調査した可能性があるだろう。

引用文献

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths and Helen Tiffin. *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*. New York: Routledge, 2000.
- Benda, Jonathan. "Empathy and Its Others: *The Voice of Asia, A Pail of Oysters*, and the Empathetic Writing of Formosa" *Concentric: Literary and Cultural Studies* 33.2 (September 2007) 35-60.
- Brando, Marlon with Robert Lindsey. *Brando: Songs My Mother Taught Me*. Toronto: Random House of Canada, 1995.
- Breit, Harvey. "In and Out of Books." *New York Times* 18 July 1954: BR8.

- Butcher, Fanny. "The Literary Spotlight." *Chicago Daily Tribune* 6 Apr. 1952: H7.
- 保坂アイヴァー 「序文」ゴードン・ワーナー『沖縄復帰物語：平和・戦争・占領・返還 1945-1972』（エグゼカティブ・リンク訳）1997年 3.
- Iverson, Douglas. "Travel Writing as the End of Empire: A Pom Named Bruce and the Mad White Giant" *English Studies in Canada* 29 (3-4). 200-201.
- 川平朝申 『終戦後の沖縄文化行政史』那覇：月刊沖縄社、1997年
- 川満達也 「敗北への肯定観に潜む卑屈と『八月十五夜の茶屋』」『英米文学』68（立教大学英文学会、2008年）99-129.
- 米須興文 『文学作品の誕生—その文化的プロセスとしての意味』那覇：沖縄タイムス社、1998年
- Kupferberg, Herbert. "The King from Ashtabula" *New York Herald Tribune Book Review*. (November 6, 1960) (*Contemporary Authors Online Gale Library Databases Accessed* 05/11/2011)
- ラミス、C.ダグラス 『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』東京：平凡社、2005年.
- 宮城悦二郎 『占領者の眼—アメリカ人は＜沖縄＞をどう見たか』那覇：那覇出版社、1982年
- 中原俊明 「米国統治最後の10年」沖縄人権協会 編著『戦後沖縄の人権史—沖縄人権協会半世紀の歩み』高文研、2012年. 48-54.
- 名嘉山リサ 「ティーハウス・デモクラテシー：ヴァーン・スナイダーの『八月十五夜の茶屋』における民主化」*Southern Review* No.27（沖縄外国文学会機関誌 2012年）141-157.
- North, Sterling. "Okinawa Tale Snickers At Yankee Paternalism." *The Washington Post* June 3, 1951:87.
- O'Brien, Kenneth P. "The United States, War, and the Twentieth Century" in Christopher Bigsby ed. *The Cambridge Companion to Modern American Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2006. 235-255.
- 大城貞俊 「文芸時評：八月十五夜の茶屋」『沖縄タイムス』2012年10月30日 11.
- Popp, Lilian M. "Vern Sneider" in Lilian M. Popp ed. *Four Complete Modern Novels*. New York: Globe Book Company, 1961. 14-17.
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (2nd edition). New York: Routledge, 2008.
- Prescott, Orville. "Books of The Time." *New York Times* 29 May 1951:21.
- Ruark, Robert. *The Detroit Free Press* (January 7, 1954) in "Sneider, Vern" *Current Biography* (1956) 589.
- Sarantakes, Nicholas Evan. *Keystone: The American Occupation of Okinawa and U.S.-Japanese Relation*. College Station: Texas A&M UP, 2000.
- Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner. *The Oxford English Dictionary* Vol. VI. (2nd Edition). Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Sneider, Vern. *The Teahouse of the August Moon*. New York: G.P. Putnam's Sons, 1951.
- Sneider, Vern. "How Ladies of Okinawa Met Holiday." *Chicago Daily Tribune* 9 Dec. 1951: (part 4 page 8).
- Sneider, Vern. "Below 'The Teahouse.'" *New York Times* 11 Oct. 1953: X1.
- Spurr, David. *The Rhetoric of Empire: Colonial Discourse in Journalism, Travel Writing and Imperial Administration*. Durham, NC: Duke UP, 1993.
- Suh, Alexandra Chung. "Movie in My Mind": *American Culture and Military Prostitution in Asia*. Diss. Columbia U, 2001. Ann Arbor:

UMI, 2001. 3005807.

上原栄子 『辻の華 戦後篇上・下』時事通信社、1989年
上原栄子・宮城信之 「対談「八月十五夜の茶屋」

『脈』45号 (1992) 56-62.

Yagi, Mariko. *Gazing the Other: A Post-colonial Reading of The Teahouse of the August Moon*. (琉球大学 人文社会科学研究科・国際言語文化・欧米文化 修士論文 2006年)

与那覇晶子 『「八月十五夜の茶屋」の原風景—ジュリと辻文化と沖縄のアイデンティティー』『世界の中の『沖縄』 演劇—女優の表象を中心とした考察』研究代表者 鈴木雅恵 (平成18年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書) 11-19.

吉見俊哉・テッサ・モーリス＝スズキ 『天皇とアメリカ』 集英社、2010年

吉村いづみ 『映画に描かれた性と民族の父権的支配 構造—大陸三部作と『八月十五夜の茶屋』、『サヨナラ』の比較分析を通して—』(名古屋大学 国際開発研究科・国際コミュニケーション専攻 修士論文 1996年)

謝辞

科研費 (22520289) 助成研究成果の一部である小論は、「上映会 & シンポジウム—『八月十五夜の茶屋』の変遷—小説から演劇・映画の受容まで—」(2011年 9月10日、於沖縄県立博物館・美術館講堂) で発表した原稿に加筆・修正を施したものである。資料提供していただいた共同研究者の名嘉山リサ氏及び与那覇晶子氏、およびシンポジウムの司会・コーディネーターを務め、示唆的な提言を与えてくれた琉球大学の山里勝己氏に深く感謝の意を表したい。